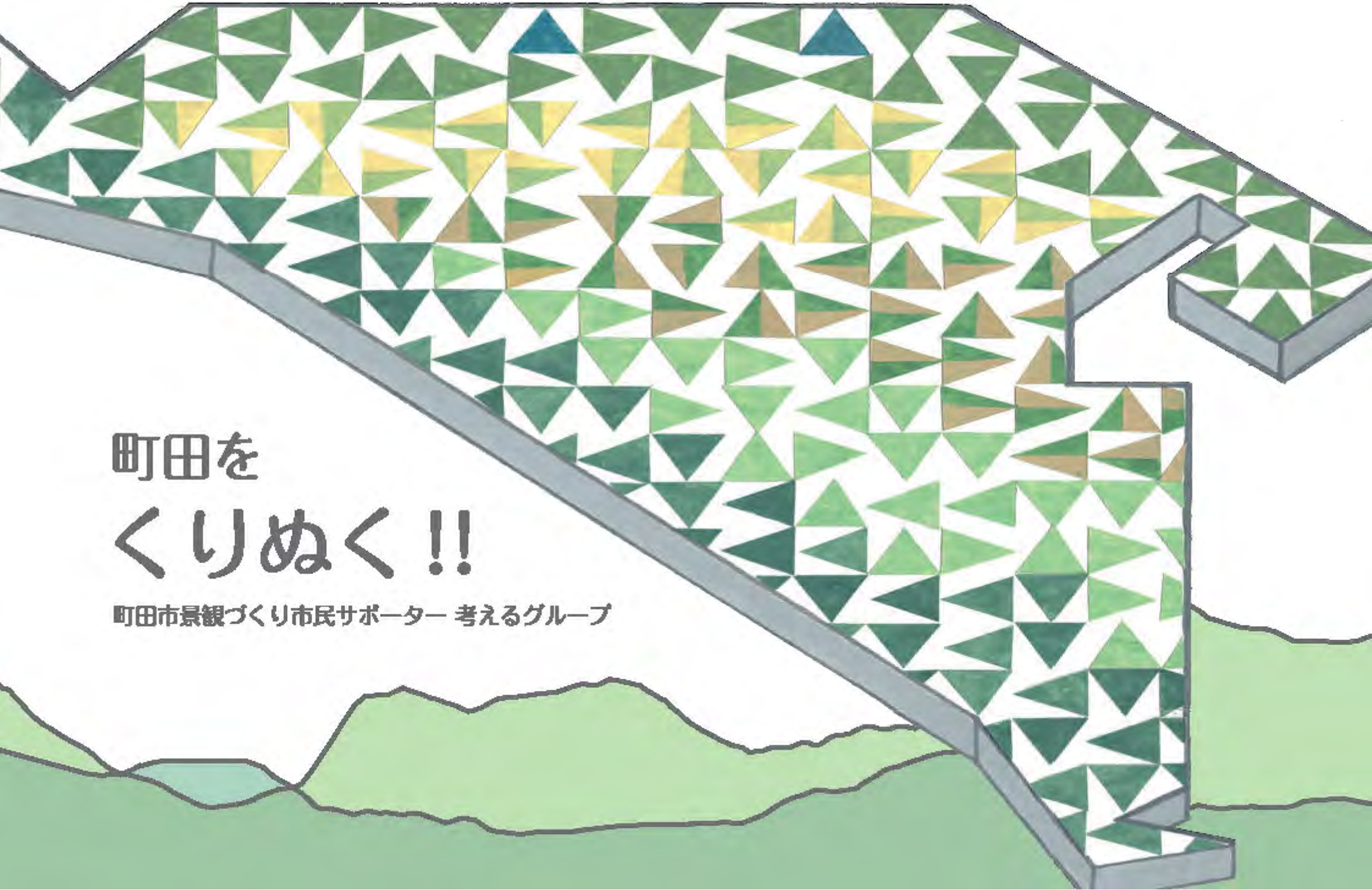


町田を
くりぬく!!

町田市景観づくり市民サポーター 考えるグループ

町田をくりぬく!!

― もくじ ―

まえがき　：くりぬき歩きから景観のタネへ　… P 01

くりぬき歩き 一覧　… P 02

くりぬき１～15　… P 04

1 相原今昔　2 多摩境通り　3 尾根緑道
4 小山田緑地　5 小野路の里　6 真光寺峠
7 鶴川盆地　8 玉学山地　9 パッチワークな世界
※ 夏の臨時企画 ジブリ映画「耳をすませば」聖地巡礼
10 馬駆の坂　11 山崎の谷　12 わさび沢
13 原町田　14 金森段丘　15 鶴間っ原

景観のタネ　… P 20

その1　足元からの眺め　… P 22
その2　ゆらぎの味　… P 24
その3　小世界の深み　… P 26
その4　つきあたりの妙　… P 28
その5　やわらかな境　… P 30
その6　いびつな辻　… P 32
その7　実は布石　… P 33

トピックス

1　人と景観　… P 34
2　私なりの景観　… P 36
3　物語　想い　景色　… P 38

まとめ　：街なかにある「タネ」だからこそ　… P 39

あとがき　：原風景としての生活風景　… P 40

くりぬき歩きのイメージ。

まえがき

くりぬき歩きから景観のタネへ

一般的に、まち歩きでその地域の名所・旧跡・風光明媚な地を訪ね歩くことは楽しく、私たちに新たな発見や心のうるおいを与えてくれます。しかし町田の景観の今を考えようとするとき、そのような場所をスポット的に巡るだけでは、地域の景観の姿を捉え切れないのではないでしょうか？　私たちは、風景が次々と移り変わる変化を常に意識して歩く歩き方を「景観まち歩き」と名付け、町田市景観づくり市民サポーター第１期「わぎり」と第２期「くりぬき」の活動を通じて、地域をくまなく見るまち歩きをしてきました。

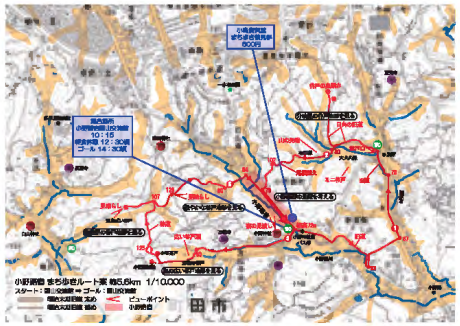
第１期「わぎり」歩き　2011 年～2014 年

町田の各地域の景観を概観しながら比較するために、第１期では、町田を含む多摩丘陵のでこぼこ地形を、常に高低差を意識しながら横断的に「わぎる」ように歩き、「町田をわぎる！」としてまとめました。そこでは、台地と丘陵地の境の景観が多彩であることや、景観は地形の高低差による影響が大きいことを伝えています。

第２期「くりぬき」歩き　2014 年～2017 年

第２期は「わぎり」から手法を変えて、対象とする地域を選び、周辺から内部に入り込むようにコースを設定し、幾重にも視線を重ね、幾つもの道筋から見通し、振り返り、視点の高さを変える歩き方を試みました。これを「くりぬき」歩きと称し、隣り合う地域との関係も考え合わせながら、「町田をくりぬく !! 」としてまとめました。

本冊子では、町田市内のさまざまな地域を歩いた 15 回の「くりぬき」歩きルートと、まち歩きから見い出した景観の素材を整理したものを「景観のタネ」として紹介します。



現在の地図に谷戸やポイントを記したコース図。

明治図にコースを重ね、タイムトリップしてみる。

まち歩きでは、歩く地域の概要とねらいを記した案内のほか、コースのチェックポイントを記した現在の地図、同じ縮尺の明治時代の地図などを手に持ちながら、メビウスの輪のようにぐるぐる巡り歩きました。

くりぬき歩き 一覧

2014年晩秋からおよそ2年間、町田市内を15回くりぬきました。その各回をこれから紹介します。ルート図には、途中で出会った「景観のタネ」や、参加者の感想なども書き入れてみました。

注：まち歩きのタイトルは、各回のテーマから私たちなりに名付けたもので、実際の地名等とは関係ありません。

1 相原今昔 (15.03) 相原駅の北～西～南～東

町田の断面の絵図を体験！

2 多摩境通り (15.05) 多摩境駅～鶴間台～竹所～多摩境通り～南大沢～小山内裏公園

暴かれた「奥」の今は…！

3 尾根緑道 (15.01) 鶴川～上小山田～常盤～小山田桜台～はなみずきの丘～平台～尾根交差点

わずか 1km 四方に詰め込まれた多様な小世界！

10 馬駆の坂 (14.11) 図師大橋～馬駆～図師～忠生～山崎～図師交差点

町田の「へそ」を歩く！

11 山崎の谷 (16.07) シーアイハイツ～山崎～忠生公園～山崎団地

台地境、谷あいに広がる新旧入り混じった佇まい！

12 わさび沢 (18.02) 南の沢～わさび沢～町田市民病院～井出の沢～中町

台地境、碁盤目街と大規模団地の間に食い込んだ谷の世界！

※ 夏の臨時企画　ジブリ映画「耳をすませば」聖地巡礼
(15.07) 聖蹟桜ヶ丘駅～いろは坂～丘上のロータリー～永山駅

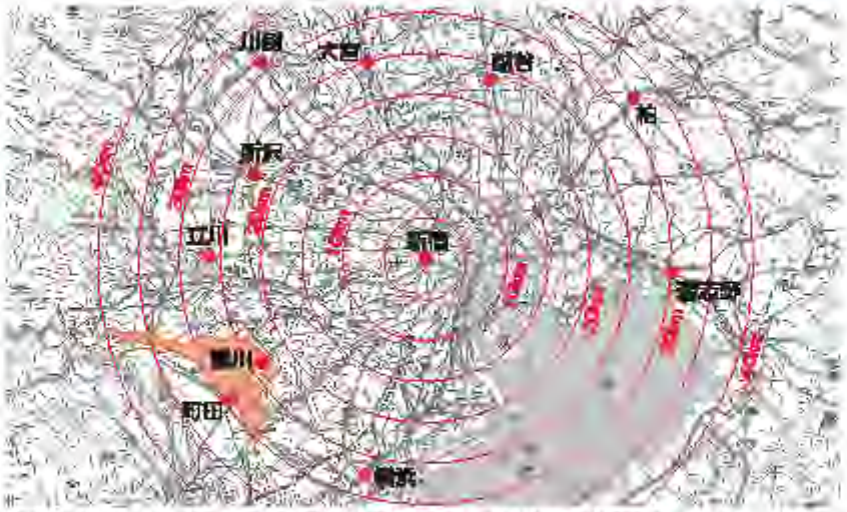
実は現実世界のほうがもっと面白かった…

◆ 町田市の位置と地形

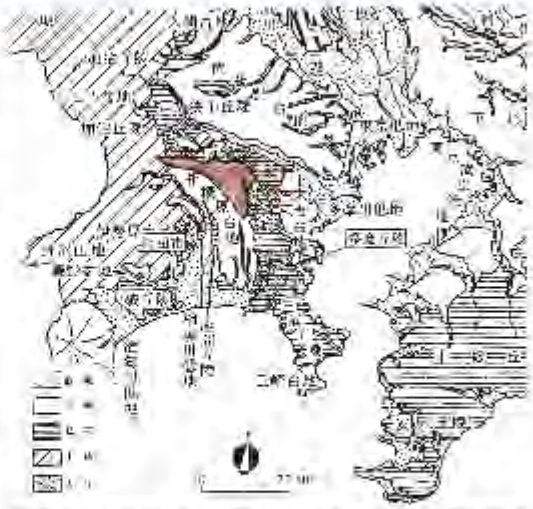
町田市は都心から南西方向、小田急線に沿っておよそ30kmの距離に位置している。人口は現在40万人強。高度成長期以降、東京のベッドタウンのひとつとして急激に発展してきた。

市域は多摩川の南に広がる多摩丘陵の南端、相模原台地との境に沿って伸び、台地境の細長い平地と、丘陵地内の起伏に富んだ地形に大別される。

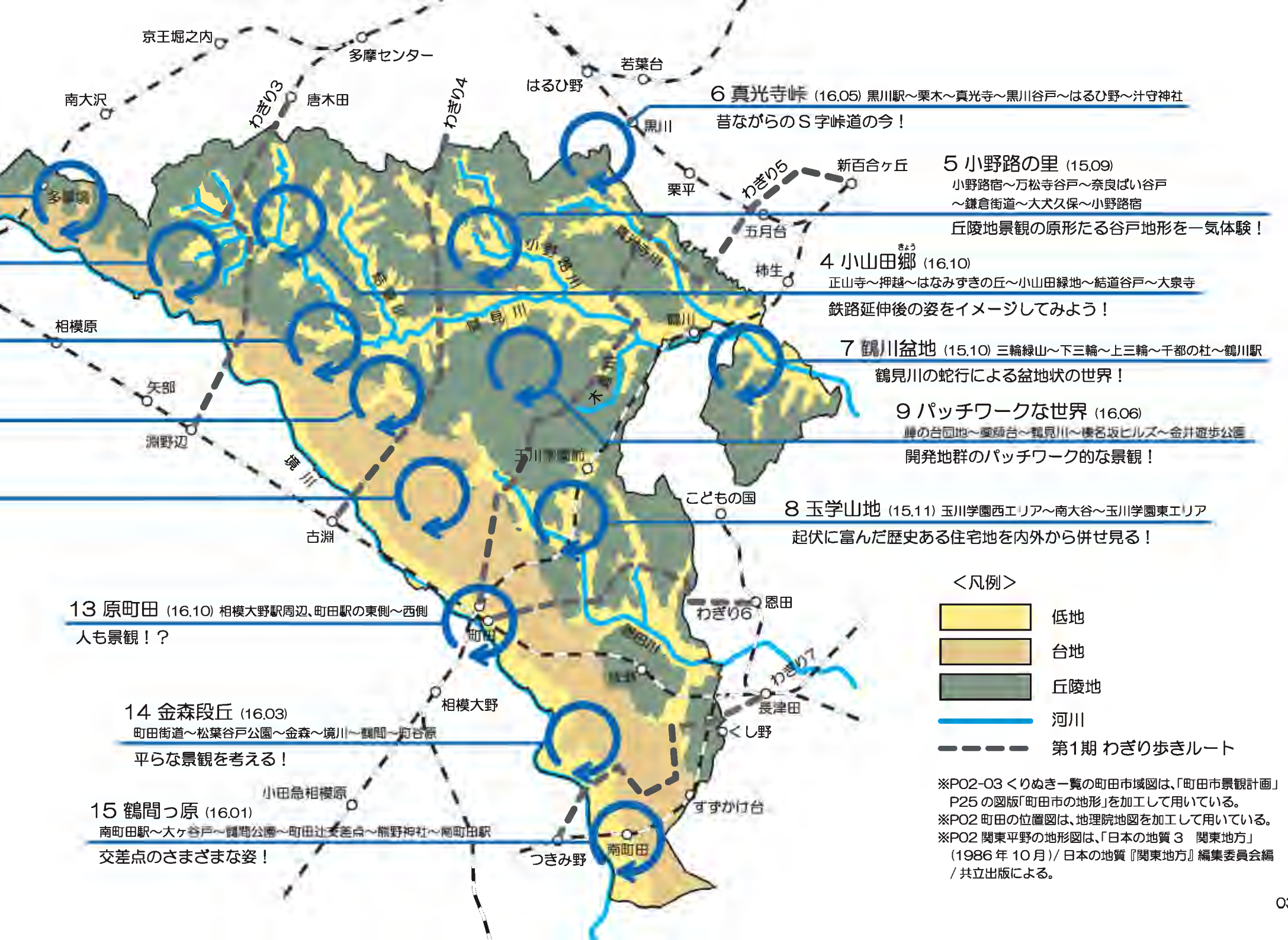
ベッドタウンとしての住宅地だけでなく、境川や鶴見川の源流域から歴史ある商都まで抱える町田は、住んでみると、東京の郊外の中でも、自然から大きな繁華街までひと通り揃ったエリアとなっている。



新宿を基点に見ると、小田急線沿いの鶴川から町田は南西方向に 25～30km、横浜・吉祥寺・柏・越谷・大宮・川崎・所沢・立川などと概ね同じ距離に位置している。



関東平野の地形と町田。長く伸びる町田は、多摩丘陵と相模原台地の間の半分を占めていることが分かる。



※P02-03 くりぬき一覧の町田市域図は、「町田市景観計画」P25 の図版「町田市の地形」を加工して用いている。
※P02 町田の位置図は、地理院地図を加工して用いている。
※P02 関東平野の地形図は、「日本の地質３　関東地方」(1986 年 10 月)/ 日本の地質『関東地方』編集委員会編 / 共立出版による。

写真1、梅林の間を抜けて丘に上り、鞍形をした丸山団地を見渡す。緑のスカイラインが更深さを感じさせ、尾根の向こうに八王子みなみ野の新興住宅地が広がっているとは全く分からない。

相原地区は細長い町田市の西部に位置する古くからの集落で、橋本駅を出発した電車は境川、相原駅、トンネルとあっという間に町田を通り過ぎ、風景はダイナミックに変化します。駅の西側と東側を尾根から境川まで、台地端の新旧の街並みを巡り歩きました。

尾根に上ると丹沢の山々がとても近く立体的に見え、そのような丹沢を見渡せる南斜面の坂がとても印象に残りました。しかも細長い市域は単なる南斜面だけでなく、谷戸が回り込んで起伏が二重になっている場所もあり、多摩丘陵南縁の尾根の緑が厚みと深みを持っていると分かりました。(約8.2km)

写真2、相原駅前団地を上る長い坂。振り返ると丹沢が近く、山並みが立体的に感じられた。

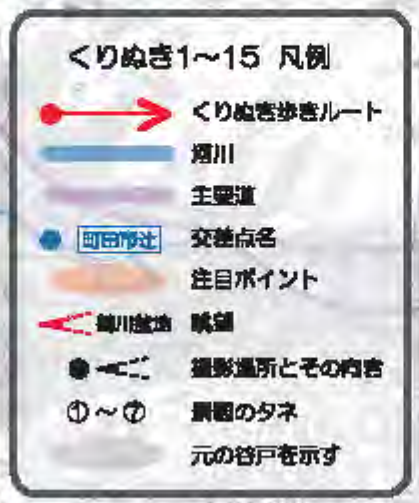


写真1、下る尾根道の右側、片所の夜越しに台地の風景を見渡す。丹沢の山々が近く、幾重にも重なって見える。同じ尾根道の左側には鶴牧の新興開発地が広がり、尾根を挟んで谷戸ごとに別世界が隣り合う様子を実感できる。

写真2、住宅地の新になりうる開発地前の交差点。崖沿いに伸びた緑は、住宅地の背景になりつつ、多摩境通りのビル群を隠すという、クッションの役割を果たしている。

多摩境通りは、京王線多摩境駅周辺の開発軸として造られ、景観計画で景観形成誘導地区のひとつに指定されています。丘陵地境の尾根に沿った開発の今を見るべく、境川と尾根の間、さらには尾根向こうの八王子側まで、小山地区をためつすがめつ見るようにくりぬきました。

境川に向かう谷戸たちの先端を均しつないだ新道は奥まった地を暴くこととなり、街を歩くと「表と裏」「手前と奥」が唐突にぶつかり合う不自然な場に幾つも出会いました。一方、新旧の街並みを馴染ませる新旧の緑のいろいろな役割とその大切さにも気づかされました。(約7.2km)

くりぬき2〈多摩境通り〉

写真1、北部丘陵でも最も奥まった谷戸先端の風景。今もまだ斜面には昔ながらの畑の風景が広がっているが、低地には宅地開発の波が押し寄せつつある。

桜でも有名な「尾根緑道」は町田市の西部、多摩丘陵の南端を囲する長い尾根伝いの道を整備したもので、季節を問わず心地よい散歩道として親しまれています。その尾根緑道は周辺の街に対してどんな景観的役割を果たしているのだろう？　そんな思いから、緑道を何度も跨ぎながら両側に並ぶ地区を巡りました。

尾根を挟んで町田街道沿いの昔からの街、鶴見川の源流域、大規模団地などが並び向かい合うエリアは、歩いてみるとわずか1km 四方ほどの広がりの中に、複雑な地形の襞を挟んでさまざまな風景が濃密に重なり合っていました。そして尾根緑道の緑も背景の中に溶け込んでいました。（約 7.0km）

写真 2、写真1の谷戸から尾根ひとつ挟んだ東側の谷戸。小山田桜台団地の裏手にあたるこの谷は大小の開発が進み、緑と住宅が入り乱れた風景が広がっていた。

尾根緑道ルート図 1/15000

写真1、押越（おっこし）地区の尾根筋から南向かいのはなみずきの丘住宅地を見る。住宅地が緑の間をジグザグに上っていく北斜面の風景は、奥行きが感じられて印象的だった。

写真2、旧道沿いにかつての街並みやアイテムが残る。

写真3、大泉寺バス停の待合室。壁一面懐かしい広告看板に埋め尽くされている。

北部丘陵の西半分を占める小山田地区は鶴見川の源流域にあたり、町田市内でも最も奥深く、今も昔ながらの風景が色濃く残っています。そして将来小田急多摩線や多摩都市モノレールが通ると、開発が進んで地域景観も変わっていくだろうと予想されます。

くりぬき歩きでは「桃源郷」的なイメージで、あえて「小山田郷」と題し、谷戸地形と新旧の街並みが複雑に入り組む景観の中を歩きました。街かどごとに、あるいは角を曲がるたびに、別の世界に出会う街並みそのものに魅了され、わくわくしながら巡るまち歩きとなりました。（約 6.6km）

写真1、小野路宿の南西、谷戸口の緩い急坂を上った山頂に思わぬ平地が広がっていた。市街を望み景観を支える背景の緑の厚みを改めて実感した。

くりぬき5〈小野路の里〉

町田の各地域を歩くとき、起伏をつくっている谷戸地形の元々の姿を知っていると、今のまちと緑と地形の関係を見る目が深まるのではないかと、谷戸が今も活きる北部丘陵のど真ん中、小野路宿を中心としたエリアをくりぬいたのがこのまち歩きです。

さまざまな形の谷戸、そのさまざまな小世界を巡りながら、小野路宿の街並みと背後の厚い緑のつながりも体験できました。最も緑豊かな中を歩くまち歩きでしたが、人の手が感じられると景観的により好ましく見え、自然と人の関わりが大事ではと改めて感じさせられました。(約5.6km)

写真2、小野路城址。今は雑草とした森の中の小さい丘だが、城があった頃はどんな場だったのだろう…

くりぬき6〈真光寺峠〉

鶴川街道が鶴見川水系と多摩川水系の間の分水嶺を越える峠は、今も昔のままのジグザグ道が残り、峠越え感をたっぷりと味わうことができます。峠を挟んで住宅地、オフィスタウン、営農団地など異なる世界が隣り合っているのも特徴です。

歩いてみると峠や街の開発前後のさまざまな姿と出会い、新旧比較することができました。そして周囲を巡った目から改めて、峠の地形を活かした真光寺公園の造りが強く印象に残りました。（約7.0km）

写真1、真光寺峠から北方を眺める。鶴川街道が足元からヘアピンカーブを下って小田急多摩線の高架下へ向かう。正面中程の緑は什守神社の杜。その奥、はるひ野の戸建て住宅地や若葉台のマンション群の背景として緑の尾根が伸びている。尾根を越えた向こうは多摩ニュータウン。足元から遠方まで多くのまちが幾重にも重なり見える、多摩丘陵ならではの眺め。

写真2、真光寺峠から南方を眺める。地形を活かした公園の先に町田の市街地を見渡せる。正面に鶴川団地や国士舞大学のキャンパスが、緑の帯を挟みながら広がっている。

写真1、鶴川盆地を北側から見る。左から柿生、麻生、早野、三輪と尾根の緑が重なりながら続き、鶴見川のつくる低地を取り囲んでいる。地形がつくる風景の骨格が今も維持されていて貴重に思える。

くりぬき7〈鶴川盆地〉

谷戸地形が一様に広がる多摩丘陵も、細かく見ると局所的に個性的な地形を見出すことができます。鶴川駅周辺もそのひとつ。鶴見川が大きくS字に蛇行しているため、やや広めの平地が四方谷戸山で囲まれ、ちょうど盆地の中に居るかように感じられます。古くから集落がありましたが、人の営みはこの地形とどう折り合いをつけ、どう利用してきたのでしょうか？

高台に上っては緑の尾根に囲まれた盆地的な世界を見渡し、下っては地形なりの新旧さまざまな場を巡るという、景観の全体と部分の関係を実感するまち歩きとなりました。（約8.3km）

写真3、鶴川盆地を南側から見る。駅前の高層化や丘上の宅地化などによって緑のスカイラインが途切れ始めている。しかし断片的に残された緑地を見直して改めて繋げれば、まだつながりは復元できそう。

写真2、高蔵寺のある丘。通りから一歩奥に、手入れの行き届いた昔からの佇まいが残っていた。

写真1、恩田川を挟んだ南向かいの高台から玉川学園を見る。正面の緑は開発当時のコンセプトを伝える風致林の名残。その向こうに玉川学園のまちが広がり、風致林はまちの核となっている。

写真3、まっすぐ下る坂の向かいに、家と緑が入り混じった丘が迫って見える。玉川学園地区ではあちこちでこのような風景と出会うことができ、まちの個性を感じさせる。

写真2、町田駅を出た小田急の上り電車は、恩田川の低地沿いに玉学山地の稜線を見渡した後、多摩丘陵内に分け入っていく。台地から丘陵地への境として、電車内からも風景の変化が印象的な場所。

鶴川盆地と同様、隣の玉川学園地区の地形も個性的です。まちは恩田川支流の大谷川が刻んだ谷を中心に広がり、起伏が密で向かいの丘が近く、丘陵地内でも山がちなエリアと感じられます。また、学園の開設と共に開発された駅周辺は、谷に対して直角に登る縦の道と等高線沿いに伸びる曲がりくねった横の道が組み合わされ、まちを印象を特徴づけています。そのような玉川学園地区を相対的にも見てみようと、恩田川を挟んだ南向かいの南大谷地区と併せてくりぬいてみました。

谷を囲んで内向きにまとまった地区そのものが小世界、縦道ごとに見える向かいの丘の眺め、横道沿いに移り変わる風景、街かどを印象付ける古木など、街じゅう至るところで景観のタネと出会いました。（約7.4km）

鶴見川と恩田川に挟まれた奥深い丘陵地は、現在さまざまな時代の大規模住宅地がひしめき合うように広がっています。いわゆる高度成長期のベッドタウンの典型的風景、町田市景観計画「住まい共生ゾーン」が想定する景観のひとつと言えましょう。新旧、大小さまざまな住宅地を一気に串刺しに歩き、開発地ごとの違いやそのつながりを体験し考える機会としました。

一度に多数の住宅地を巡ることで、時代ごとの開発思想の違いを実感したり、開発境の急斜面や旧集落溜りに残った緑が住宅地の雰囲気づくりに影響しているのではと気づきました。密集するバラバラな住宅地を断片的な緑がその間を埋めながら結いでいるかのような街は、いわば「パッチワーク」。地域景観を見るキーワードとして面白そうに思えました。(約7.1km)

写真2、階段から続く道が、鶴見川を挟んだ向かいの丘まで続いているかのようで、つい惹き込まれる。

写真3、鶴師台住宅地内の遊歩道。左右にゆらぎ伸びる道に面した家々が、整然と並んでいるはずなのに不規則に建っているような錯覚を受け、家並みがより豊かに感じられた。

駅前桜ヶ丘から南の桜ヶ丘の住宅地に上るつづら折りの坂道。

桜ヶ丘の丘上から北を見渡す。正面は百草の丘。手前を大栗川が流れる。

夏の臨時企画
ジブリ映画
「耳をすませば」聖地巡礼

夏の臨時企画として、町田を離れ、ジブリ的な多摩丘陵の見方 / 捉え方を追体験してみようと歩きました。

酷暑の中、町田とは違う景観を味わいつつ、ゴール後のビール目指して歩き切りました。

桜ヶ丘の丘から永山方面を見渡す。

桜ヶ丘の住宅地のど真ん中にあるロータリー。